

## 幼児に於ける遊戯の問題

——フリーベルの所説を中心として——

吉岡千秋

(一)

少くとも教育の問題に思いを潜める人は誰でも「遊戯」の問題について考える事なくして人間の教育を語る事は出来得ないであらう。

遊戯——娯楽 (recreation) は、人間にとつては、必然的なものである、同時に又それは絶対的なものである。人は食物なくしては生き得られないと同様に、遊戯 (娯楽、休養) なくしては生存出来な

う。  
まして、幼児における遊戯の問題を考えて見る場合に、特にそれは幼児教育の立場から考えて見る時に、教育者は絶対に看過す事の出来ない問題である。

即ち、成人に於ける、遊戯乃至は娯楽の持つ意味が、明日の活動に對しての、若しくは明日の生活に對して活力源のな或いは創造的な意味をもってその重要性を我々に考えさせるのに對して、幼児に於ける遊戯はむしろ人間形成的に至大な意味を有するのである。

即ち、それは幼児の教育に、パーソナリテイの形成に至大の關係を持つ。

我々は幼児の教育を考える時に、絶対に遊戯の問題を度外視する事は許されないのである。幼児の生活は即ち遊戯であり、遊戯は即ち生活であつて「生活が教育である」というデュロイの立場を借りる迄もなく、教育——生活——遊戯は三角形的、乃至円環的關係に於て把握し理解されなければならず、若し我々がそれを分断して認識せんと欲したならば、生命のないなきがらとしてしか把えるほかはないであらう。

さればこそ、人間教育に思いを凝らした人達は何時の時代でも幼児の教育を考え、そしてそれは幼児の遊戯の問題に到着し、幼児に於ける遊戯の有する教育的価値を高く評価したのである。

幼児教育の高唱者、そして又幼稚園の創設者であるフリードリッヒ・フリーベル (Friedrich Froebel 1782~1852) も又、幼児期に於ける遊戯のもつ教育的意義を高く評価した一人であるということが出来る。

以下簡単に、フリードリッヒ・フリーベルの所説を中心として、遊戯の問題を考えて見たいと思ふ。

(I)

フリーベルに於ける遊戯の問題は、フリーベル教育学の「中心原理である所の、自発活動の原理、若しくは創造性の原理に接続する。

大人の立場から考えて見て必要度の高い「もの」(教材)——即ちそれは子供達の現在の生活には直接の意味も功用も考えられず、明日の生活に必要であると考えられるものであるが——を人間の初期の時代(即ち幼児)から教え込むという、所謂鞭と教科書による「教え込み」(indoctrination)の中世の時代から、児童を児童として見て、大人の生活から児童を解放し、新しい児童観を打ち立てたのは、周知のとおりジャン・ジャック・ルソーであったが、我がフリーベルも勿論ルソーの崇拜者であり、ルソーの児童観の完全なる共鳴者であった。(実際、フリーベルの伝記を詳細に調べた人なら誰でも了解出来る事であるが、彼が一八〇六年、ホルツハウゼン家——Freiherr von Holzhausen——の家庭教師として就任した時に、その三人の子供の教育の為に原野に別荘を設けて、ルソーがその空想的教育児エミールを教育した如き、教育法をとらんとしたのである。然しその事は彼の意図の通りに事は運ばなかったのであるが、事の成否は別として、とに角その辺りに彼の意図を我々が容易にうかがう事が出来るであらう。)

教育は、目の見えない者に対して視力を外部から注入するが如きものでは決してなくて必性の開發であり、ベスタロッターの所謂「自助へのほう助」にはかならないとフリーベルも確信していたの

である。内なるものを引き出すという教育(education)の言葉の意味そのままを理解していたのが、彼即ちフリーベルであった。

即ち、彼によれば教育活動の本質は「内的理性即ち神を純粹に完全に実現する様に励まし」取扱い、且つかかる境地に進む道と手段とを指し示す事であった。即ちフリーベルは「内的理性」——神——を「実現する様」に勧ます所に教育の本質を直視し、大人の必要と考える「もの」をフェネロンの所謂「柔かき頭の中に」注入する事では決してなかったのである。

(フリーベルの教育思想について我々が若し考察せんとするならばここで当然「人——神の問題」に立ち入らなければならないのであるが、その問題は又別の機会に考察する事にして、ここでは深入りしない事しておく。)

子供は成長して後に人間になるのではなくして、フリーベルは子供の中に大人を見ていたのである。その意味に於て子供を大人の縮図と考えた中世に於ける児童を見る眼鏡を逆に使用して子供達をのぞいたという事が出来るであらう。

一切の人間の萌芽を幼児の中に於て見出し、それが絶えず成長し、發展して行くものであると見る所に、フリーベル教育学の核心があるとと言える。

(II)

さて、私は前節に於てフリーベルが如何に人間の教育を考えていたかという事の一例を考えて見たのである。彼が自発活動を教育の

中心原理として把握していたという事は、従って幼児の活動を、そして同時に必然的に遊戯の教育的意義を高く評価した事の理解に対しての基礎的な条件であるからに外ならないからである。

幼児は常に活動するものである。動的な存在である。その事は、今あらためて説明する迄もないであろう。幼児が動的な存在であり常に活動するというその「活動」とは即ち幼児にとり、生活でありそしてそれは又同時に遊戯にほかならないのである。

然らばその「活動」とは一体何であろうか。即ちそれはフレイベルによれば「自己のうちに持っているもの、自己のうちに欲しているものを外にも表わしたいのである。また自己のうちに秘められたるもの、自己のうちに生き生きとしているものが、自己の外にもありたいと願う」のである。即ち子供の胸の中にあるものの外的表現が活動であり、作業であり、その活動の根源は、フレイベルのいう生命でなければならぬのである。

そして、幼児の生活とは具体的には、遊戯であり、従って遊戯はフレイベルによれば「子供が自己の内界を自ら自由に表現したものの」であり、「自己の内的本質の必要と要求とに応じて内界を外界に表現した」ものなのである。従って遊戯は「この期の児童の最も純粹な精神的所産であり、また人間生活全体の模範ともいべきものである」訳である。

即ち幼児の遊戯は「最も純粹な精神的所産」である。幼児の純粹な精神的所産であるが故に我々は、幼児の「あそび」をとおして、幼児の精神を、即ち「心」を見る事が可能である。

即ち、フレイベルによると、幼児の遊戯は幼児の「心の鏡」である訳である。従って我々は幼児の遊戯をとおして、幼児の心を見る事が可能である訳であり、この事は又幼児の遊戯をとおして、幼児の精神の啓培が可能であるという事が出来る訳である。従ってフレイベルは幼児の遊戯のもつ教育的意義を極めて高く評価し彼は遊戯をもって「すべての善なるものが出て来る源泉」であるとしたのである。即ちあらゆる善きものはすべて、その根源をこの遊戯に持つと考えたのである。フレイベルは「自体の疲れるまで倦まずに落ちて遊ぶ児童は、成長の後必ずや犠牲的に他人の安寧や幸福を計り、ひいては我が身の幸福をも増進する様な落ち着いた根気強い有為の人間になるであろう。」と遊戯のもつ功德をほめたたえたのである。フレイベルのこの考えをそのままに我々が受容出来るかどうかは別としてフレイベルによれば「よく遊ばない子供」は立派な人間になる事は出来ないと考え、少くとも「よい子」ではないと考えたのである。フレイベルのこの考え方がそのままに妥当するかどうかは別としても「よく遊ぶ子」はよい子と言った標語風のこの言葉に我々も又反対する事が出来難いのはあるまいか。

「小人閑居而為不善」とは、フレイベルのこの表現をそのままに成人の間に移行しての、成人に於ける場合の遊戯の教育的な乃至は倫理的な東洋に於ける表現であると言う事が出来るであろう。

さればこそフレイベルには「児童が熱心に遊びに没頭し、十分遊んで疲れてよく眠り入る様は、この期における児童生活の最も美しい現象」として看取出来た訳である。

(浪花短期大学)